- スタッフのライフヒストリー
- セクシュアルマイノリティとはどういうことか
- 全体の流れが良かった
- ドラマ

＜一番分かり難かった講義等＞

- 専門的な知識について（時間が少なかった為だろう）
- ビデオの Q&A が話きれなかった
- 生徒が学校生活を送る中で、どのような問題があったかを伝える内容
- 学校現場に何を望むのか、どこまで現場は対応できるか

<u>今後も同様な研修は必要と思うか</u>

＜必要と感じた講義等＞

- 知らないことを知るのは必要。わからないから偏見が生じる。
- 体験談
- パワーポイントを使っての説明
- レジュメの内容と、みなさんのお話
- セクシュアルマイノリティについての理解
- いろいろな話をきく講義（ディスカッション等）
- LGBT の人の生の声
- ライフヒストリー
- 対生徒にお願いしたい
- 基本的な知識について、現状など
- 今なぜマイノリティについて話すことが必要か

＜不要と感じた講義等＞

- DVD の内容をもう少し検討してほしい

<u>今回の研修で良かった点</u>

- 実体験がきけた点。
- 教員の割合について言及していた点。
- 自分の体験を、ストレートに語っていただけたことが良かった。周りにも、きっといるだろうし…と考える、身近な存在としてとらえることができた。パワーポイントも、とても見やすくわかりやすかった。もっと時間に余裕があれば、じっくり学びたかった。
- ファシリテーターの方のお話を身近に聞いて、途中からこの方たちのお話をきくことそのこと自体にお互いにとても価値があったのだろうと思った。ディスカッションの人数も適当であった。
- 身近な問題として自分に置き換えて考えることが出来た。もやもやの時期を共に過ごす大人としてどのようなことに理解し、アドバイス・支援することがいいのか考える大変良い機会だった。
- 実際に悩みを持っている方から話を聞くことができたこと。これまで TV 等で知ってはいるが、なんとなく遠い話のようだったが、身近にありうること、自分にもあるかもしれないことと、研修を

通して考えることで理解したい、理解できる受け止められる人でありたいと思うことが大事だと感じた。研修を受けることでそう思う人が少しでも増えていけば、社会も少しずつ変わると信じる。

- ファシリテーターの方のお話を（実体験等）聞くことで、LGBTについて身近に感じることができた。今まではテレビなどで見た極わずかな知識・情報だけで、あいまいだった部分が、DVD・パワーポイント等の説明で少し明確になった気がする。
- グループの中に入ってお話をしてくださった方がとてもよかった。悩みや考えていること、今までにあったお話を聞けて、考えさせられた。この先の将来、結婚や子どものことなど、いろんな壁があるとは思うが、乗り越えていってほしい。
- 重たい内容ではあったが、実際にマイノリティの方に語って頂き、ディスカッション形式にすることで、より身近なこととしてとらえることができたのではないか。
- ライフスタイルを聞かせてもらって、グループディスカッションで意見交換ができたところ。共有とまではいかなかったが、身近な問題として認識するきっかけとなった。
- 身近な話を聞けて、とてもよかった。でも自分の子どもが…と思うと、客観的に考えられるかどうか…と考える機会でもあった。
- 当事者の話が良かった。日頃あまり考えることのない内容だったので、良い視点をもつことができた。
- 身近に感じられ、自分の意識付けになりとてもよかった。
- 若い方が現在進行形で自らを開示するお話を伺えた点。
- 性同一性障害と同性愛者が違うことが分かった。
- 普段話題にあまり取り上げない内容だったが、改めて、話し合えたことは良かった。
- 個人的にも興味のある話題だったので、積極的に参加できた。マイノリティの当事者の方から直接体験を聞けたことがよかった。
- グループで個々に話し合えたこと。マイノリティといわれている人たちの背景がわかったこと。
- グループファシリテーターの方に、話がきけてよかった。高校生なのに、落ちついていた。
- 実際に悩んでいる人はこういったことが嬉しい、こんなことにショックを受ける、ということをお話聞けたのがよかったです。
- ファシリテーターの方のお話を聞いてこういう思いを抱えているのだということが知ることができたこと。（友達、家族、社会とのことなど）
- 当事者の経験談が中心であった事。グループ討議だったので意見を言いやすかった。
- 具体的に、ライフイベントを聞けて良かった。普段の何気ない会話にもLGBTの人たちを傷つけてしまうことがあるということを知った。
- 少人数でファシリテーターの方のお話を直に聞けてよかった。まだ人前で話すことにも抵抗があったかもしれないのにたくさんお話してくださり、いろいろ考えさせられた。
- 実際にセクシュアルマイノリティの方に話をきくことができ、グループだったので質問もしやすく、多くのスタッフの方がきていたので、少数派ではないのだと思えることが出来た。
- 性同一性障害等の問題について、自分自身、身近にいなかったし、テレビ等で知る程度だった。実際の人の思いを知ることができ、知らないことで、差別が起きると思う。なんら変わりないと感じた。知ることと、相手の立場になって考えることが、理解につながると思う。それはすべてのことにつながると思う。
- 同性の人を好きになる方の体験を実際に聞くことができて、より理解することができたと思う。ま

ずは身近に感じられることが差別や偏見をなくしていく第一歩だと感じた。相手のことを一人の人間として尊重した上で、考え方や価値観の違いを認めることが大切だと思った。

- スタッフが包み隠さず心のすべてを吐露してくれたのが良かった。
- 身近で見かけることはあっても、話を聞いたりする機会はなかったので良かった。
- マスコミ等で性同一性障害の方々が活躍しているが、一般的にこの問題で悩んでいる人々の活動の場があると知れてよかった。若い頃から一人で悩んでいる若い人の生の声が聞けてよかった。
- 実際に同性の方が好きな方のお話をうかがうことができて日常の言葉の遣い方などにもっと人権意識をもっていく必要があると実感できた。
- 実際にLGBTの方のお話が聞けて良かった。友だちとか知り合いの話だとどうしてもぼんやりとしてしまうので。
- ファシリテーターの方、高校生なのに、よくがんばっていたと思う。時間が少なく深められなかったのが残念。表面的な問題提起で終わってしまったけど、まず関心をもつということから始めるという意味でもいいのかも。
- 研修終了後も、お話することができてよかった。
- 考えもしなかった事を考えることができた。
- 教師・生徒ともに、このような話し合いや研修があればよいなと思った。
- 講師の大学生の話の内容がしっかりしていて参考になった。生徒に対する説明の参考にしようと思う。
- カミングアウトの経過を聞けた。
- 自分の現在の在り方で対応できそうなことが分かった点。
- 聞くだけの研修でなく、質問したり話し合いしたりする中で、様々な意見を耳にすることができてよかった。
- 生きた話を聞けて良かった。
- 昨年、県の研修でリビッドの方々とロールプレイングを行なった。本日の研修を聞いて思い出し、改めて考えることがあった。
- 本やメディアでは、勉強していたし、研修も受けた。それでも、ご本人からのお話や今現在の状況などは、初めて聞いたので、とても勉強になった。私たちの立場で思慮していかないことが多いと改めて認識した。言葉にも気を付けていきたいと思う。
- こういう点に気を付けてほしい等の、これからの自分の言葉に多大な影響のある内容だった。
- 自傷してしまう程、苦しんでいるとは、また、自傷がやめられない人はもしかしたら、（今、思えば）と思ったりする。
- 生徒にこんな人もいると話してあげたい。
- 総合司会が上手いと思う。はじめは長いと思いましたが、上手く構成されていたと思う。
- 憶測や推測の域を出てなかった自分自身の意識が少し変化（偏見のようなものが少なくなった）したと思う。教育現場において偏見を持って、生徒に接することは少ないと思うが、どの生徒がどうなのかということに気付く観察があるか不安。

<u>今回の研修で悪かった点</u>

- ディスカッションの時間が少なかったこと。
- グループワークの時間がもう少しあるとよかった。スタッフの方のライフヒストリーをさまざまな

パターンを知りたかった。

- ディスカッション形式の難しさとは思うが、話が盛り上がってきたところで、DVD 視聴が入ってしまった。全体進行は悪くなかったとは思うが、時間配分などを再考してもよいかもしれない。
- もう少し各々が考えを深められるような時間設定と進行だとよいと思った。性マイノリティ、性同一性障害を知り、理解する上での基礎的な知識について、情報があるとよい。
- DVD、途中で終わってしまい、内容ももう少しまとまっている方がいいと思った。
- DVD ちょっと不愉快に思った。極端すぎる。みなさんのありのままの話を聞くことの方がずっと意味があると思った。
- 時間不足の為、消化不良な感じがする。
- 時間配分が短く、ディスカッションで深く掘り下げられなかったのが残念。もっとライフヒストリーを伺いたかった。
- 次回は、話の進め方にもう一工夫した方がよいと思う。
- 話し合いが途中で中断されてしまうこと。何分まで話し合ってくださいとあれば、それに合わせて話し合いができたと思います。
- グループに分かれてからの進行。
- もう少しテーマがしぼってあると良かったような気がします。「セクシュアルマイノリティを理解するには」など。
- パワーポイントでの説明が、時間がなく、早く過ぎてしまい、わからないところが多くて残念だった。
- 学校の生徒に今回の研修を生かすこと（場面、機会）はなかなかないと思うので、指導を意識しにくかった。
- 短い時間の中でスライドがあり、DVD もあると少しばかり窮屈に感じた。
- スタッフの方の話に倫理性を見つけるのは難しいと感じた。色々な愛の形や受け止め方があって良いと思う。
- 1 時間半では導入で終わってしまうと思う。込み合うけど 2 展開にせず、8 グループ同時にやって 3 時間やればもっと充実したのでは。
- 知識や考える場を与えられ、個人としての対応レベルでは全く意味がない。学校としてどうとらえて考えていくかを今後具体化しなければ研修会をやる意味がない。
- 片耳しか聞こえない（難聴）人間にとって、周りで色々な声がしている形式はとても辛い。ほとんど聞き取れない。
- 時期の設定がよくなかった。
- 新しく得た知識がそんなに多くない。
- 焦点がぼやけた感じがした。
- 知識や考える場を与えられ、個人としての対応レベルでは全く意味がない。学校としてどうとらえて考えていくかを今後具体化しなければ研修会をやる意味がない。
- グループの話を全体に共有することを増やしてほしかった。
- 対生徒の時にはもう少しだけ、正装っぽい感じで…。もちろん人は見た目で判断できないが。
- 講師の方の声が聞きとりにくいところがあった。
- プレゼンでの主張がマイノリティの理解から一歩踏み込んだレベルのこと、具体例がやや不足していた。

その他の意見

- 性の問題に限らず、知らないもの、自分の中で知らないうちに出来た「当たり前」にあてはまらないものに偏見が生まれていると思う。違いを認めることは勇気がいるし、心がどうにかなりそうなくらい悩むことだと思うが、突破すると自分もそして周りもクリアになる。生徒は違う問題（自分の兄弟に障害者がいること）をカミングアウトするときにやはり葛藤や悩みを感じていたのでそれを思い出した。とても面白い研修、本当に感謝している。
- 性のことに限らず、親や祖父母は子や孫に理想を描いているもの。その理想から外れていくのを見ているのはとても辛いし受け入れ難いものなのだろうなぁと DVD のおばあちゃんを見ながら自分の家族を思い浮かべていた。これからも壁がたくさんあるかと思うが、自分の気持ちを大切にしていってもらいたいと思った。
- お話を聞いて、今よりももっと、セクシュアルに関する壁が低くなれば良いなと感じた。意識面の壁は、とても崩すのが難しい課題だと思うが、今回参加して、とても勉強になった。
- 「マイノリティ」と呼ばれる子どもたちと接する仕事なので今回のお話も、よその団体？よりは身近に感じやすいのだろうとは思う。たとえば保護者の方の話で、自分のこの障害受容にとても時間がかかったことをお聞きすることがある。肢体不自由の子よりも見た目にわからない知的障害の子のお母さんに、よりその傾向が強い印象がある。それと一緒で、見た目にわからないから偏見も強いのかなと思った。（見た目にわかっても、「かわいそう」とか、自分が優位に立てるからきもちわるいといわれないかなとかまとまりがないが）。
- 体験談を複数の前で話すというのはまだまだ勇気のある時代だと思う。そういう時代を変えていかないといけない使命があるが、そんな中、貴重な体験を聞かせてもらい、ありがたかった。今後も可能な範囲で継続していってくださるとありがたい。
- セクシュアルマイノリティの方も、障害のある方も…みんなが理解し合い、思いやりを持って生活できる社会になるよう、「人として」「学校として」できることを考えていきたいと思った。
- 「ゲイ、レズビアン、性同一性障害」という言葉を聞くのは、まったく初めてではない。身近ですが、やっぱり身近なこととして捉えるには、まだまだであると思う。障害を持つ子と接してきてマイノリティということでは同じ意識があったつもりでも、実際のお話を聞くと違った。「知らない」という言葉もすでに傷つけているのだろう。本日いらっしゃった方の勇気に頭が下がるとともに、こうした活動を（声をあげていくこと）今後も続けていってほしいと願うばかりである。まずは知ってもらうというところなのだろうか。日本も、イギリスやフランスのようになれるのであろうか。
- すばらしい研修であった。みなさんが、今日ここにいてくれたから、100 人近い教員の意識が変わった。受け取ったことを、「どのように」ポジティブに教育者として伝えていくか、これが我々の仕事である。頑張りたい。
- 障害のある子たちを理解していくプロセスと同じだと感じた。無理解ということは無知ということ。周囲の人が無関心ではいられないという運動を展開していってもらいたいと思う。
- みなさんと色々な話をすることが一番の勉強になると思った。もっともっと話がしたかった。
- トランスジェンダーについて、詳細に知りたかった。
- できれば、いらっしゃった方全員のエピソードを聞きたかった。
- この時期（10 代～20 代であろうか）、恋愛感情の強い時期を超えた人のお話も聞いてみたかった。
- 偏見の多いナイーブな問題であったので、なかなか本音を言えなかった先生もいたのでは。
- マイノリティという点では、養護学校も近い感じがする。「ありのまま」を受け入れるのが「当た

り前」の世の中になるといい。特に、日本は受け入れが難しいかも。「みんな違ってみんな良い」。

- 私は海外にいた経験があり、女友達とは腕を組んで歩いたり、手をつないで歩いたり、よくしていたので、日本に帰ってくると、日本人は、かなりそのようなことを嫌がるのだと感じた。韓国の友人は特にそういう事は当たり前なので、色々と国で違うと思った。日本も段々と変わっていくといいなと思う。
- 養護学校の生徒でマイノリティの子がいた時、どのようなところに相談すればよいのだろうか。
- 色々考えさせられる研修であった。テレビやネットだけの話に終わるのではなく、日常、身の回りのことに考えられるように気を付けていきたいと思った。
- 今まではっきり知らなかったことも、わかってスッキリした。
- 本当に理解をしていくことは当事者にならないと難しいかもしれないが、少数派になることが私はこわいなと思ってしまうことが多い。いろんな思いと葛藤してきて、その中で、自分自身のこと受け入れていることは、本当にすごいと思った。理解していきたい、自分自身も、自分の弱さを受け入れていけたらいいなと思うことができた。
- 途中からの参加だったので、どう発言して良いかわからなかったのだが、当事者の方の話を伺ったり、周りの先生方の話を聞いたりした中で、私自身、人に言われて、辛い思いをしたことを思い出した。今回の話題とは違った問題だが、相手の立場を考えず何げなく言ったことで人を傷つけてしまうということがあると思う。「知ること、相手の立場になって考えられること」が人間関係を築く根本だと感じた。
- これからの時代色々な形で性同一性障害に関して益々オープンな時代になると思うが、愛の形を人に理解を求める必要あるのかな？と思った。性同一性障害に関しては、時代と共にトイレやお風呂等の問題が出てくるのでこちらをもっと聞いてみたかった。
- 世間に広く知っていただきたい内容なので、これからの活動がより広がっていきますよう、応援している。
- これからも壁が多々立ちはだかるかと思うが、周りの理解ある方々を巻き込んで乗り越えていってほしいと願っている。
- 性的マイノリティの方も、例えば障害を持っている方などと同じように、それは私が数学を苦手なのと同じように、目が見えない人は見るのが苦手なだけなのだとか。つまり、その人の個性なのだというように思っています。ただ、誰もがそんな風に思えないだろうし、そういうことを頭で分かっても生理的になかなか…という人もいるだろうし、本当に難しいと思う。またクラスに、もしかしたらいるのかもしれないというのは考えたことが正直なかったので考えるきっかけになってよかった。ただ、その子が私に言ってきてくれる可能性は多分低いし、周りの生徒との関係など、どうしようと思う。とにかく色々考えるきっかけになった。
- LHR で取り上げてみようと思う。
- 教員という立場で考えた時にどういった対応をしたら良いのか、どのように生徒から話を聞きだしたら良いのかなど指導していただきたかった。
- 今回はセクシュアルマイノリティをテーマにしていたが、私が仕事をしている内容が一人一人の生徒をどのようにして理解しているかと通じるものであった。人を理解する難しさ、受け入れるだけの数量を、備えていなければいけないと思った。
- 私も高校時代はマイノリティで悩んだ。
- 学校現場ではカミングアウトさせるのが大変だろうと思う。高校の現場でいかにそうさせるのか、

考えていかなければならないだろう。

- 発信を受けとめる能力を磨きたい。
- LGBT の生徒などがいた場合、SHIP やそれ以上のどこに相談したら良いのか、その相談等を紹介してもらいたい。インターネット等では、その良し悪しがわからない。
- 生徒指導に活かしていきたい。
- 学校の中でセクシュアルマイノリティの生徒に対してどのように対応していくか。クラスに 1～2 名いる現状をふまえどのような教育をしていくか、どう変えていくかを検討すべきと思う。
- 「アイデンティティの確立期」と青年期をよく説明するが、「自分はこれで良いのだ」と思うようになるのは、やはり大学生くらいになってからなのだろう。不安に揺れる高校生をどうしたらよいか。生徒との関係ってそんなに深いわけではない。生徒の方からの不信感もあるし、難しい。
- これから様々な形でのサポートが必要だと実感した。家族の支援があったことに素晴らしさを感じた。
- 教師に何をして欲しいかとか、クラス内で、どう伝えていくか例があるとよい。
- まだまだ一般的に理解されていない部分が多々あると感じた。もっと理解を得られる活動を助けられることができればと感じた。

厚生労働科学研究費補助金　エイズ対策研究事業
HIV感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・
認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究

学校教育におけるMSMとHIV感染予防

研究協力者：森川　英子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部）
研究代表者：日高　庸晴（宝塚大学看護学部）

研究要旨

我が国のMSMなどのセクシュアルマイノリティの児童生徒への支援やHIV感染予防の指導に関しては、学校教育内において明確に位置づけられてはいない。しかし、今日の学校において個人化・情報化によりMSMなどのセクシュアルマイノリティの児童生徒の顕在化が“いじめ問題”と絡まって始まっている。そのような状況の中で10代の感染者報告数は増加しており、学校教育課程におけるMSMの児童・生徒への支援はエイズ対策として重要課題である。

よって本研究は、MSMの若者の言葉を通じて、学校教育におけるMSMの児童生徒への支援やHIV感染予防の指導のあり方を明確化することを目的とし実施した。スノーボールサンプリング方式でリクルートした10名の研究協力者の面接内容についての質的分析を行った。その結果、幼稚園、小学校と同質的成長後、思春期の衝動に目覚めるとともに混乱が始まっていた。中学では周囲の友達と比較探索しながら自分を受け止めてくれる存在を虐めなどのつらい体験をしながら探しつづけていた。高校時代には、日常の学校場面で同性への衝動を抑えきれず意識的危機に陥っていた。そのため自らを閉ざしたり、また受容してくれる仲間を求めて自ら行動したりしていた。大学等では、自分の性、自分の在り方、社会との関係性を受容する道を自ら歩んでいた。MSMの若者は、それぞれが傷つきながら先達や仲間の存在で歩き続ける力を獲得していた。これらの結果より、学校教育として、MSMなどのセクシュアルマイノリティの存在自体を受け入れることが出発地となることが示唆された。

A．研究目的

2002年7月には10代のHIV感染者が5人となり、エイズ動向調査委員会委員長が「若年者への対策の充実が必要」と述べてから10年余を経たが、今もって10代のMSMへの支援が教育課題であると学校で語られることは少ない。その理由は量的分析の数字マジックであり“少ない”という評価が10代の感染者が増えている今も続いている。

よって本研究はMSMの小・中・高等学校における生きにくさとHIV感染予防についての語りを通じて、今日の学校教育におけるMSMの児童生徒への支援や男性同性間のHIV感染予防の指導のあり方を明確化することを目的に実施した。

B．研究方法

研究参加者の募集はスノーボールサンプリング方式で10名リクルートした。面接場所はセクシュアルマイノリティのためのコミュニティセンター（大阪：dista、横浜：SHIP）とし、調査実施期間は平成24年10月～11月とした。面接時間は45～50分程度であり、面接内容は、以下の項目を網羅した半構造化面接とした。

1）年齢、学校時代を過ごした都道府県名
2）性的指向が他の子どもと違うことに気づい

た年齢

3）その契機

4）その時の周囲の状況

5）その後のエピソード（性的指向に関連した先生の発言とそれを受け止めた時の心の揺らぎ等）

6）修学旅行や健康診断などの学校行事で困難や不快を感じた場面

7）中学・高校でHIV感染予防、エイズ教育を受けたことや記憶する内容

なお、インタビュー終了後に謝品を進呈した。

分析方法

面接内容の逐語記録をデータとし、データの中から学校教育における「MSM」として語った内容を抽出し、その文章を区切りと考えられる部分で分け、文脈等で検討しながらコード化し、概念を作成した。さらに、それらからサブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。分析は信頼性・妥当性を確保するために、質的研究に経験がある大学教員のスーパーバイズを受けデータの解釈も共同で行い、カテゴリーの修正を行った。

用語の定義

セクシュアルマイノリティ：性的指向や性自認等における少数派のこと

学習指導要領：文部科学省が学校教育法等に基づき、全国同一水準の教育実施のために各学校での教育課程（カリキュラム）を編成する際の基準を指す。これにより、小学校、中学校、高等学校等の教科等の目標や大まかな教育内容が定まる。

（倫理面への配慮）

インタビューは対象者のプライバシーが確保される場所で行い、語りたくない内容は話さなくてもいいこと、インタビューを途中で中断してもいいことを伝えた。インタビュー内容を承諾が得られた場合のみICレコーダーに録音し、承諾が得られなかった場合はメモを取ることの了解を得た。また、対象者が過去の出来事を思い出し、感情が高ぶるようなことがあれば、本人にインタビューを継続するかを確認し、場合によっては、レコーダーを止め、じっくりと話を聞き、ケアを行う体制をとった。なお、研究計画は甲南女子大学研究倫理委員会の審査・承認を得た。

C．研究結果

1）研究協力者の概要

研究協力者10名は、20代後半の社会人が1名、20代前半の大学生および専門学校生が9名であった。また、男性との性体験は中学校時代が2名、高校時代が7名、高校卒業後が1名であった。

表１　研究協力者の概要

NO	年　代	立　場	性的指向や性的違和感を感じた時期・エピソード	性交体験
1	20代後半	社会人	母によると「幼稚園の時、男の先生と結婚したい」と言って「それは余り言わない方がよい」と言ったという	中学
2	20代前半	学　生	中学1、2年で胸毛がイヤでショックだった	中学
3	20代前半	学　生	中学で女子から「好き」と攻めてきてほしくないと思った	高校卒業後
4	20代前半	学　生	小学校5年生で転校生の男子を好きになった時	高校
5	20代前半	学　生	高校出るくらいの時、ゲイかなと思ってインターネットで調べた時	高校
6	20代前半	学　生	小6くらいの時、今思えばあったかもしれない	高校
7	20代前半	学　生		高校
8	20代前半	学　生	中学1年で部活の先輩が好きになった時	高校
9	20代前半	学　生	小学校5年生でビデオを見た時	高校
10	20代前半	学　生	高校1年生できちんと理解ができた時	高校

2）カテゴリーの全体構成

文中において用いた記号は次のとおりである【　】:コアカテゴリー、《　》:カテゴリー、〈　〉:サブカテゴリー、{　}:ラベルとし、斜字体の箇所はデータ引用部を表している。

MSM の若者の小学校時代、≪混乱≫の激流に身を置く毎日を過ごしていた。<性の衝動>に驚き、不安を内在したまま誰にも打ち明けることなく、インターネットからの情報｛治るものだ｝という内容に依存していた。また、インターネットを探るうちに予期せぬサイトから、｛パソコンで男性の裸体｝に夢中になっていた自分を振り返っていた。学校では、転校してきた男子児童に｛スキンシップをたびたびする自分｝に気づき、自分の行動に驚いたりもしていた。同級生や成人も含めて｛男性に興奮｝する自分の意識に気づき、家族や周囲から常に<らしさ>がないという評価に悩みながら｛らしさとは｝と問い続けて模索する毎日を続けていた。今まで、テレビの画面に映るタレントへの<偏見>に気づかず、母とともに「オカマは気持ちが悪い」と一緒に｛自分が嘲笑した対象に自分がなった｝こと｛親が驚愕する対象となったつらさ｝に改めて苦しんだと語る。日々の生活では、<いじめられる>ことが度々あり、近所の男子児童から｛窃盗命令｝で脅されたり、｛病原菌とはやされる｝などのいじめを受けていた。しかし、経験的に、いじめ問題の｛幕引きは「いじめられっ子」も悪い｝という終り方が早いことは知っていた。ただ、自分の心の中では腑に落ちていないため自ら｛いじめられた理由の合理化と納得｝を図りながら混乱する自分を支えていた。

MSM の若者の中学校時代、周囲を≪比較探索≫し、<つながる喜び>を求め、孤独に苦しんでいた。時に｛遠距離恋愛もどき｝でわざわざ会いにきてくれる大人と幸せな時間を過ごしていた。また校内の｛部室での性交｝を初めて男子部員と体験をした。また｛初恋は先輩｝であり、クラブ活動を通してつながる喜びを実感していた。しかし、それ以上に<孤独に苦しみ>、本当の自分を話せる友人に出会えず<寂しさ>は苦痛であり、｛孤独｝は、つらい思い出だったと語る。その｛孤独な存在から自傷行為｝も繰り返していた。思春期の目覚ましい成長は<コンプレックスとなり>友だちが指摘した｛早い体毛｝や濃い胸毛は、男性を意識する場面として心に突き刺さったという。

中学校においても<いじめられる>できごとが生じ、｛裸にして性器をさらす｝その結果として

性器の大小をからかわれる屈辱、スプレー缶の｛炎で火傷｝させられる脅しや実際の火傷、また｛教科書に卑猥な落書き｝を黒マジックで書かれた体験も持っていた。さらに、これらの事象の対応を巡って＜先生への思い＞が深く刻まれる結果となった。教師が｛性を笑いの種｝にすることや｛授業中の「ホモ」・「オカマ」と発言する｝ことから先生への信頼が崩れていくことを感じていた。先生がいじめの芽を理屈ですり替えたことから結果的に｛先生がいじめの事実を隠した｝と今も若者の心の棘となっていた。また、ヘアスタイルを疑い生活指導として｛先生が僕の髪をママレモンで洗った｝ことも写実的に、語る口調に若者の心が伺えた。また、逆に学校の外部講師である｛普通の助産婦さんが正面から避妊の話｝をしてくれたことは、全身で受け止めていた。また、先生が｛いじめっ子に理由を正す｝言葉とその姿勢を見て本当にうれしかったと語っていた。

MSM の若者の高校時代、学校生活では、同性に対する自分の眼差しに性的な関心の存在に気づき＜心理的危機に陥る＞場面が生じた。時には、｛同性への欲望に気づき授業から逃避し｝、保健室で落ち着きを取り戻したりした。またクラブ活動の｛合宿では大浴場に入らない｝よう集団での行動から外れ、時間差をつくるよう工夫していた。また、友人の MSM は授業中に同性に書いた｛ラブレターを見つけられ、退学、精神科受診を指導された｝が、理由は精神科受診で治ってから復学を許すとの学校と両親の合意であった。同質であることが求められる学校生活では異質な存在であり、＜存在がいじめを受ける＞ことが多く、｛「性交させるか、金をだすか」と脅された友達｝の存在や｛女子の前で裸にされた｝という屈辱を受けた出来事を言葉少なに語ったが、このような経験の繰り返しから｛いじめを理由に修学旅行には不参加｝することで高校生活をかろうじて保っていた。しかし、常に＜隣合わせの自殺＞がちらつき、｛頑張る力は友だちとのつながり｝でそれは、幼な友達の存在であった。しかし、｛7 年間の孤立、全存在を否定されたようで自殺念慮｝が常に身にまとっていた。それでも＜灯りの先生＞はいた。｛先生が「人の存在事実は、誰の承認も必要ない」と教えてくれた｝その言葉や、｛石川大我さんの存在は頑張る力となって｝、今も力になっている。また、時折避難していた｛保健室の先生はゲイの僕を無条件に受容｝してくれた。MSM として初めて性交を体験した時、＜HIV の感染予防＞については｛相手が社会的地位のある人でコンドームを装着してくれた｝ことから、以後はコンドームの実際の装着を理解することができたという。また、友人の彼が｛陽性者であり｝常に身近な問題であった。事実、｛友だちは陽性の検査結果から保健室登校｝となったが、その中で自分を取り戻して大学に合格した。もし、｛陽性になったら、保険や将来を考え｝、安心できる社会資源は勉強をしておかないといけないと思うようになったが、高校時代までに｛コンドームの役割は避妊と感染予防だと知りたかった｝。自分が MSM であることを両親に打ち明けたいが＜両親の存在＞は｛育て方が悪かったという自責感をもつ両親｝を見るのがつらく、現在は姉だけに告白しているという。また、｛とまどいつつ受容した両親｝には感謝をしているとも語った若者もいた。高校時代に自分自身について人権作文により＜カミングアウト＞をすることで｛自分を受け入れる｝方略をとったという。

MSM の若者の大学等では、性的、自己的、社会的、それぞれの≪アイデンティティの統合≫を繰り返しつつ、今を歩み続けている。現在＜パートナー＞と共に暮らしている者も時に｛遠くの安らぎより、2 丁目でリスクを選ぶことがあり｝、3 ケ月に 1 回は HIV の検査を受けている。また、大学生活を送る若者は｛連絡がとれる関係を保つ｝関係にありながら、HIV 検査のことは言い出せないことが多いという。成長に従い＜両親の思い＞を気にかけるようになり、｛清水の舞台から飛び降りる思いで受け止め

た両親｝や｛暗黙の了解をした両親｝、｛認識的理解を示した両親｝等の様々な苦悩を持つ両親を思いやる若者になっていた。そして社会的なアイデンティティ形成を思わせる自らの＜生き方が見える＞ようになってきたという。例えば、他大学でMSMについて｛自ら講演したことが確信につながった｝、アルバイト等の体験を続けることで｛バーチャルな世界から現実へ｝踏み出し、他人との関係ができるようになり、｛普通の生活｝をすればなんとかなるという思いを実感できるようになってきた。このようにつながることで｛超自我的存在｝の人間像が見え、自分の努力目標を具体的にもてるようになった。この毎日の積み重ねをする｛僕のありのまま｝でいいと思えるようになったという。

3）各カテゴリー分析

表2【「生きにくさ」から「自分らしさ」へ - HIV感染予防の視座にたって】の構成

カテゴリー	サブカテゴリー	ラ　ベ　ル
＜小学校＞ 混乱	性の衝動	全治する
		パソコンで男性の裸体
		好きになった転校生
		スキンシップが多すぎる
		男性に興奮
	らしさ	“らしさ”とは
	偏見	自分が嘲笑した自分になった
		親が驚愕する対象となるつらさ
	いじめられる	窃盗命令
		病原菌とはやされる
		幕引きは「いじめられっ子」も悪い
		いじめられた理由の合理化と納得
＜中学校＞ 比較探索	つながる喜び	遠距離恋愛もどき
		部室での性交
		初恋は先輩
	孤独に苦しむ	寂しさ
		孤独
		孤独な存在から自傷行為へ
	コンプレックス	早い体毛
	いじめられる	裸体の辱め
		炎で火傷
		教科書に卑猥な落書き
	先生への思い	性を笑いの種に
		授業で「ホモ」・「オカマ」と発言する先生
		先生がいじめを隠す
		先生が僕の髪をママレモンで洗った
		助産婦さんが率直に避妊の話をしてくれた
		先生がいじめっ子に理由を正した

＜高　校＞ 危機から受容へ	心理的危機	同性への欲望に気づき授業から逃避した
		合宿では大浴場を避けた
		精神科受診を強要
	存在が虐めの対象	「性交か、金か」と脅された友達
		女子の前で裸にされた
		いじめが理由で修学旅行は不参加
	隣合わせの自殺	頑張る力は友だちとのつながり
		7年間の孤立は、自らの存在否定で自殺念慮
	灯の先生	先生が「人の存在事実は、誰の承認も必要ない」と教えてくれた
		石川大我さんの存在は頑張る力
		保健室の先生は僕を無条件受容
	HIVの感染予防	社会的地位の相手がコンドームを装着してくれた
		身近な陽性者の存在
		HIV陽性の結果で保健室登校
		陽性になったら、保険や将来は
		知りたかったコンドームの役割
	両親の存在	自責感の両親
		とまどう両親
	カミングアウト	自己受容
＜大学等＞ アイデンティティの統合	パートナー	遠くの安らぎ、近くのリスク
		適切な距離感
	両親の思い	清水の舞台から飛び降りる思いで受け止めた両親
		暗黙の了解をした両親
		認識的理解を示した両親
	生き方が見える	自ら講演したことが確信につながった
		バーチャルな世界から、現実へ
		日常の生活
		超自我的存在
		僕のありのまま

4）Raw データ

＜小学校＞

性の鼓動に驚く

小 5 では見てはいけないものを見てしまって、その時に性的な興奮を覚えまして、それから、これは思春期に特有なもので治るものだと書いてあったので、思ってしまって、高校 1 年までは隠していました。隠していたというより分からなかったのです。

＜中学校＞

いじめられる

解剖＊になっていることが職員室で噂になっているのですよ。それを知っていながら次の時間に（先生）早めに来たのですよ。その時、先生が来ていると気づいた子が何もなかったかのように洋服をこちらに投げて、こちらが着替えるのが遅かって、そうしたら入ってきた瞬間、（先生は）「見えた、見えた」そういってよろこびましたよ。その当時で 52,3 のおばちゃん（先生）

＊解剖：イジメられている人の着ている服を脱がして裸にするイジメのこと

＜高校＞

心理的危機

（高校の体育で）ひたすらゴールを打つ練習があって、みんなひたすらシュートを入れて回って、あまり体育が好きでなかったのもあるのですが、なんかすごく息苦しくなってしまって、突然授業を早退させてもらって保健室に入ったのを覚えていますね。（略）なんか、男性だけの状況がつらくなってしまったということ。

カミングアウト

高校 1 年の冬に部活の男の先輩に初恋をして、それではっきりわかったのです。女の人からも告白されたことは 2 回あるのですが、それでもやはり、無理だなと思って、それではっきりわかったので、高校 2 年の夏に人権作文で「僕はゲイです」ということをカミングアウトして、自分なりに MSM について勉強して、正しい情報を得て、LGBT に行ってゲイが特別なことではない、どこにでもいる男の人だなあと思った。

＜大学＞

生き方が見える

講演後はゲイで悩んでいる子が僕に相談しにくる。その意味でカミングアウトしてよかったな。そのためにカミングアウトしたのですよ。うつ病になったことで、また、救う人が増えてきた。手を差し伸べるエリアが増えたので。

D．考察

小学校時代、心と体に起きはじめた性衝動を不安のうちに受け止めていた。そして自分が性描写の多い漫画やビデオをみた結果とする自己責任論で苦しんでいた。また、他の児童と比較して同性へのスキンシップを繰り返す自分自身を受け止めかねている時期があった様子も見られた。

中学校時代、指向や態度の違いから「いじめ」の対象となり、苦しみと受容のアンビバレンツな体感をしながら周囲の友人と比較し、自己を探索している様子が語られた。また、同時期に同性との性交体験をした者もいた。しかし、教員はいじめの事実を矮小化したり、いじめへの加担と同等同質な笑いをMSMの生徒に与えていた場合もみられた。

高校時代、彼らは小学校、中学校を通じて「弱い存在として生きにくさを生きる」ことを重ねながらMSMの先達や仲間に出会い、少しずつ生きる力を獲得していた。一方で出会いの中では“HIV感染予防”知識と実際の性行動が結びつかず、友人として2名のHIV感染者が登場した。

中学・高校時代の性教育やエイズ予防教育は、MSMの児童生徒にとっては、いじめ被害や居心地の悪さに対応してくれない先生の記憶が勝り、授業での学習内容は「殆ど覚えていない」という言葉が多く聞かれた。しかし、外部講師の実直な話は、今もなお映像として記憶に残っている事実は大切な示唆と思われる。

大学等の彼らの現在は、傷ついた過去を持ち、時にはうつ病等にも陥っていた。しかし、一方で多方面の活動から自他を通じた自己受容を得ていた者もいた。同時に、わずかながらHIV感染に関しては、他者が多者と化して、感染リスクの不安を予期しながら繋がりを求めて浮遊する姿もみられた。

各段階の教育全体を通して、彼らの心を震わす“出会い”が行動変容の原点であることが伺えた。従って教員には“出会う”の一員として彼らの求める存在になりうるか、その資質が問われていた。

学校教育への示唆

本研究の結果から、学校教育におけるMSMの児童生徒への支援やHIV感染予防の指導のあり方ついて、以下のような示唆を得た。

(1) いじめ問題の背景にMSM問題が複雑に絡んでいないか、視座を通して分析すること
(2) 教師間の日常会話に“性を笑いの種にしていないか”教師の質の評価としての観察眼を持つこと
(3) 自分の力で生きるモデルを見つけ、呪縛をとき、自己解放の道を進む彼らを常に肯定すること
(4) ピアエデュケーションの手法で彼らの学級での居場所を確保し、課題を乗り越えること

研究の限界と今後の課題

本研究は、MSMと自認した青年10名からのデータ収集であり、インタビューに応じたというバイアスが大きく内在している。そのため、本研究結果を一般化することは、他のMSMの若者の課題に気づかないという壁がある。しかし、今の現実を乗り越えている彼らの存在もまた事実である。

今後の課題は、気づかなかった彼らの存在を受け入れ、学校職員全体の会話にしていくことから始まると思われる。

E. 結論

本研究における結論は、学校教育として、MSMなどのセクシュアルマイノリティの存在自体を受け入れる重要さを示唆したことである。学校は、多人数の児童生徒であることから同質集団として見えやすく、一律の教育活動を展開していく傾向がある。しかし、同質に見える中に自らの性的個性に戸惑う児童生徒の存在がある。各教員も12年間の小・中・高等学校生活を送る彼らの存在を受容し、成長の歩みを支援し続けることが求められていた。彼らが「僕のありのままでいい」という身体感覚を獲得できるよう支援する重要さである。「僕のありのままでいい」という思いを満たすために彼らは、科学的認識を豊かにし、保健行動につなげていく「知りたかったコンドームの役割」という言葉であ

る。この積み重ねが大学や実社会の場で若者は超自我的存在と出会い、乗り越え、自らの社会的アイデンティティを備えていく事実が改めて示唆された。

F．発表論文等

1）森川英子、山田全啓、赤羽　学、今村知明．高校生の喫煙と家族喫煙との関係について．日本公衆衛生学会総会、2012 年 10 月 24-26 日、山口市．

2）森川英子、赤羽　学、佐野友美、小川俊夫、今村知明．学校閉鎖から捉えたインフルエンザ（H1N1）2009 伝播の軌跡．日本学校保健学会、2012 年 11 月 10 日、神戸市．

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
HIV感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・
認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究

インターネットによるMSMのHIV感染予防に関する行動疫学研究－REACH Online 2012－

研究分担者：嶋根　卓也（国立精神・神経医療研究センター）
研究代表者：日高　庸晴（宝塚大学看護学部）
研究協力者：松崎　良美（津田塾大学国際関係学研究科）

研究要旨

本研究ではMen who have Sex with Men (MSM)におけるHIV感染予防行動の動向把握と、その関連要因を明らかにすることを目的に、インターネットを活用した行動疫学調査を実施した。9,857名（平均年齢30歳、居住地は全都道府県に分布、スマートフォンからの回答73%）のMSMより有効回答を得た。主な知見は以下の通りである。

1) 対象者の54.6%が検査生涯未受検歴群（これまでに一度もHIV抗体検査の受検歴がない者）であり、過去1年以内受検群（過去1年以内にHIV抗体検査を受検した者）は22.4%であった。
2) 検査未受検者がこれまでにHIV抗体検査を受検しなかった主な理由として、「忙しく、時間がないから（33.4%）」、「検査に行くのが面倒くさいから（29.8%）」、「陽性結果が出たら怖いから（23.3%）」、「自分のHIV感染の状況を知りたくないから（14.2%）」が挙げられた。
3) 検査未受検者の特徴として、HIV/AIDSに関するメディア曝露が低く、MSMにおける流行認識が低く、MSM同士で話題になる機会も少ないことが明らかになった。
4) 検査未受検者は、「彼氏・パートナー（64.1%）」や「MSMの友達（35.8%）」といった身近な存在にHIV抗体検査をすすめられたいことが明らかになった。
5) コンドーム非常用群は、コンドーム常用群と比べ、性交時の薬物使用割合が高かった。覚醒剤や5-MeO-DIPTのような規制薬物のみならず、脱法ドラッグ（ハーブ等）も性交時の薬物使用割合がコンドーム非常用群において高かった。また、薬物を一緒に使用する相手としては「ゲイの友人・知人（58.8%）」が最も多く、薬物の使用場所としては「ホテル・ラブホテル（46.6%）」が最も多かった。

以上の知見を踏まえると、検査未受検者が検査を受検しない理由からは、「忙しい」、「面倒くさい」のように日々の生活に追われ、HIV検査に行く時間をなかなか取りづらい状況にある可能性が示唆される一方で、「怖い」、「知りたくない」のように自身の健康に向き合うことを意識的に（あるいは無意識に）避けている可能性がある。また、検査未受検者の受検行動を促進するためには、HIV/AIDSに対する流行認識のあるMSMや、検査行動を実践しているMSMを通じて、その周囲にいる検査未受検者に対して働きかけていくことが有効な可能性がある。また、ゲイタウン利用率の低下を踏まえれば、検査未受検者にHIV/AIDS情報を正しく伝える上で、MSM向けに開発されたSNSやアプリなどMSMにとって身近なツールを活用したインターネット介入が効果的かもしれない。

一方、性交時薬物使用とコンドーム使用との関連性を踏まえると、脱法ドラッグが新たなセックスドラッグとして使用され、HIV感染リスクを高めている可能性がある。薬物を使用するMSMは、HIV/AIDS対策と薬物依存対策の両面から捉えるべき交差点であり、その予防・治療・ケアにあたっては各々の専門領域の枠を超えたより包括的な対応や連携が求められる重複個別施策層といえよう。

A．研究目的

HIV/AIDS 対策において MSM（Men who have sex with Men、以下 MSM と表記）が注目される理由は、我が国の HIV 新規感染者の多くが男性同性間の性的接触で占められているという事実に他ならない。厚生労働省エイズ動向委員会によれば、わが国における HIV 感染の拡大は依然として続いており、その傾向はとりわけ東京や大阪などの都市部における増加傾向が著しい。特に日本国籍男性の新規 HIV 感染者の 6～7 割の感染経路は男性同性間の性的接触によるものと報告されている。

現在、MSM は、後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針 [1]（いわゆるエイズ予防指針）において、個別施策層（感染の可能性が疫学的に懸念されながらも、感染に関する正しい知識の入手が困難であったり、偏見や差別が存在している社会的背景等から、適切な保健医療サービスを受けていないと考えられるために施策の実施において特別の配慮を必要とする人々）として位置づけられていることから、様々な角度から MSM の HIV/AIDS 予防・治療・支援に関する研究が進められている。

その一方で、MSM は可視化されにくい集団であり、接近困難層（hard to reach population）という一面もある。MSM のコミュニティ（いわゆるゲイタウン）がある都市部（東京、大阪、福岡など）においては、CBO（Community based organization、以下、CBO と表記）と呼ばれる団体が、MSM に対する HIV 感染をはじめとする性感染症の予防啓発活動を積極的に行なっている。例えば、エイズ予防のための戦略研究（平成 18 年度～22 年度）の報告書 [2] によれば、阪神圏において HIV 検査受検者に占める MSM 割合は保健所では横這いであるものの、クリニックにおいては上昇し、コミュニティでの予防啓発活動が MSM の検査行動を促進させたと結論づけている。

しかし、すべての MSM が CBO の予防啓発活動に曝露されているわけではない。前述のエイズ予防のための戦略研究によれば、阪神圏で HIV 検査を受検した MSM における予防介入資材の認知割合の最大値は、保健所において 13.9%、クリニックにおいて 37.2%と報告されている。筆者らが、昨年度実施したインターネット調査（REACH Online 2011）によれば、過去 6 ヶ月間に商業系ハッテン場を利用した MSM は 6～19%程度であり、ゲイバーの利用も 24.6%にとどまっている [3]。しかも、こうしたゲイタウンの施設利用率は経年的に減少傾向にあることが明らかになっている。ゲイ向け施設の利用率が低下している背景の一つとして、出会いの場が、インターネット上のソーシャル・ネットワーキング・サービス（いわゆる SNS）や、スマートフォンを中心としたアプリケーションソフトウェア（いわゆる、アプリ）の中にシフトしたことが影響している可能性がある。

以上を背景として、本研究では MSM における HIV 感染予防行動の動向把握と、その関連要因を明らかにすることを目的に、インターネットを活用した行動疫学調査を実施した。先行研究によれば、MSM におけるインターネット普及率は比較的高いことが示されている [4]。また、従来の調査方法と比較し、インターネット調査には、1）研究参加者の匿名性の確保が容易、2）日本全国から研究参加者を募ることが可能、3）研究参加者の都合と時間に合わせて研究に参加可能 [5]、4）性行動や性的指向などセンシティブな調査項目を含む研究の場合、従来の質問紙調査よりもデータの欠損値が少ない、といった利点がある。スマートフォン等の携帯端末を通じたインターネット接続が急増する近年のインターネット事情を考慮に入れ、今年度は、携帯端末（従来型携帯電話、スマートフォン）を通じた情報収集を試みた。

MSM の HIV 検査行動のさらなる促進が必要であること、改正エイズ予防指針において薬物乱用者が個別施策層として位置づけられたことを踏まえ、今年度は、MSM における HIV 抗体検査行動の阻害要因の探索、および薬物使用が

HIV 感染リスクに与える影響を検討に重点を置いた。

B. 研究方法

1. 対象者リクルートメント

本研究はMSMを対象に複数回に渡って実施してきたインターネット調査 Researching Epidemiological Agenda for Community Health (REACH) Onlineの一連のシリーズであり、経年的モニタリング的な意味も兼ねている。そこで本研究プロジェクトを「REACH Online 2012」と名付けた。平成24年8月27日から平成25年1月31日までの間に、Secure Socket Layer (SSL) によって保護された調査用Webサイトに無記名自記式質問票を掲示し、バナー広告等を通じて、対象者を募集した。

なお、調査サイトの告知は、MSM 向けインターネットサイト上のバナー広告（計 31 サイト)、CBO が発行するニュースペーパー（1 団体）とゲイ向け雑誌内での広告、ソーシャル・ネットワーキング・サービス (Twitter) を通じて行った。Twitterは2012年8月20日～2013年1月31日に151種類のメッセージを計567回投稿（いわゆる、つぶやき）した。投稿内容は、研究実施の案内に加え、前年度の調査結果やバナー広告協力サイトの紹介、MSM 向けのイベント情報についても触れた。

2. 対象者の除外基準

研究目的を達成するために、以下の除外基準に当てはまる者は除外し、いずれの項目にも該当しない者を分析対象者とした。

1) 海外に在住している場合
2) 生物学上の性別が男性ではない場合
3) 属性情報（年齢、居住地、最終学歴、年収、性的指向）のすべてが欠損している場合
4) 重複回答が疑われる場合

Cookie情報に含まれるユニークな文字列（訪問者 ID と命名）が同一の場合、同一端末の同一ブラウザから調査サイトにアクセスしたことになる。今回は携帯端末からの回答に限定したため、訪問者 ID が同じであれば、回答者も同一人物である可能性が高い。そこで、本研究では訪問者 ID の重複を根拠として重複回答を特定した。重複回答が発生した場合、原則として初回データを採用し、2 回目以降の回答は削除した。ただし、初回データよりも2回目以降のデータの方が、属性情報に欠損がみられない場合は、例外として2回目以降のデータを採用し、初回データを削除した。なお、一部の旧型携帯電話では、Cookie機能に対応していない機種もある。こうした機種を使用している場合は重複回答を特定することはできない（Cookie機能に対応していない回答は全体の 3.3%)。

3. セキュリティ

インターネット調査を実施する上で重要なことの一つはセキュリティの確保である。本研究で用いた調査研究専用のホームページは、Hypertext Transfer Protocol（HTTP）を Secure Socket Layer (SSL) で保護することによって、研究参加者が回答したデータを暗号化してサーバに送信、情報漏洩防止策とした。

サイトの構築、収集データの際には、File Transfer Protocol (FTP) での接続を許可し、主に SSL で保護した FTP over SSL (FTPS) で暗号化してサーバに接続を行う。ただし、開発元でも管理者IDを発行してID保持者のみがサーバへアクセス可能なように制限した。

インターネットとサーバの間にサービス提供内のプロトコル以外で不正なパケットの転送がないよう Firewall で適切なブロックを行った。

研究に用いたサーバは Redundant Array of Inexpensive Disks (RAID) 機能を有しており、不測の事態によりサーバのディスクが停止した場合も代替ディスクによりシステムが正常に稼動するように配慮した。なお、サーバが設置されている建物へのアクセスは厳重な入室管理チェックによってセキュリティが保たれてい

る。

消火設備にはハロゲン消火装置が設置され、その他にも、EIA 規格の 19 インチラックの使用、電源系統の多重化、センター内のバッテリー、非常用発電機設備、精密な空調管理と耐震設備により安全な運用を行った。サーバの稼動状況を監視するため、サーバの URL に対して HTTP リクエストを定期的に送信し、その応答をチェックした。応答がない場合には、監視者に警告メールが送信されるよう配した。

質問票の重複回答の防止は Cookie 機能を用いてその対策とした。2 回目以上の回答分については同一人物からの回答であるか基本属性や回答傾向から、回答を有効であると見なすことが可能であるかを検討・判断した。

一連のアンケートの流れの中で、アンケートの最初ページのアクセス時にユニーク ID を一時発行し、ページ内に保持する。次のページへ遷移するたびにユニーク ID をアンケートシステム側がチェックすることによって、途中ページへ直接アクセスすることを防止した。

4. 調査項目

1) 基本属性：年齢、居住地、最終学歴、年収、性的指向、性的指向のカミングアウト

2) 性行動：過去 6 ヶ月間における男性との性交経験の有無・性交内容（アナルセックス、オーラルセックスなど）・性交相手の種別、過去 6 ヶ月間に利用した MSM 向け施設（ハッテン場など）、性交時のコンドーム使用状況

3) HIV および他の性感染症：性感染症診断歴、診断された性感染症名（HIV、梅毒、B 型肝炎など）、MSM における HIV/AIDS に関するメディア曝露（過去 6 ヶ月間）、HIV/AIDS について話題にした経験（過去 6 ヶ月間）、日本の MSM における HIV/AIDS の流行認識、直接の知人・友人で HIV 検査を受検した人数（過去 6 ヶ月間）、直接の知人・友人における HIV 陽性者数

4) HIV 検査：HIV 検査受検歴、受検回数、受検場所、受検動機、検査をすすめた人（すすめられたい人）、今後の受検意思、検査を受けない理由

5) 喫煙・飲酒：喫煙習慣、飲酒習慣、過去 1 年間の問題飲酒行動（イッキ飲みなど）、過去 30 日間の暴飲（Binge drinking：1 席において 5 杯以上を立て続けに飲む行為と定義）[6]

6) メンタルヘルス：うつ病・自殺リスクのスクリーニング尺度である K6[7,8,9]、受診歴、服薬歴

7) 薬物使用：生涯使用経験（10 種類：違法ドラッグ［いわゆる脱法ドラッグ］は、ハーブ系、パウダー系、リキッド系のように形状別に分類した）、性交時使用経験（10 種類）、入手経路、使用パターン、使用場所、脱法ハーブを使用している友人・知人の数

5. 統計解析

統計解析に先立ち、年齢データに基づき、年代別（10 代、20 代、30 代、40 代、50 代以上）に分類した。居住地データに基づき、13 の居住地エリア（北海道、東北、関東、東京都、北陸信越、東海、愛知県、近畿、大阪府、中四国、福岡県、九州、沖縄）に分類した。HIV 抗体検査受検歴に基づき、「検査生涯未受検歴群（これまでに一度も HIV 抗体検査の受検歴がない者）」、「過去 1 年未受検群（HIV 抗体検査の受検歴はあるが、過去 1 年間は受検していない者）」、「過去 1 年以内受検群（過去 1 年以内に HIV 抗体検査を受検した者）」の 3 群に分類した。コンドーム使用状況に基づき、「常用」、「非常用」、「アナルセックスなし」の 3 群に分類した。

以上、新たに分類された「年代」、「居住地エリア」、「HIV 抗体検査歴」、「コンドーム使用」の 4 変数をアウトカムとして、すべての変数とのクロス集計を行った。なお、HIV 陽性者の検査受検時期が不明であるため「HIV 抗体検査歴」の分析時のみ分析対象から除外した。一部の変数（HIV 検査受検歴、HIV およびその他の性感染症診断歴、HIV 検査受検場所、MSM におけ